14) 新バイデン政権に教育現場が何を期待するか

公立学校を訪問するファーストレディーのジル・バイデン氏とカルドナ教育長官

ファーストレディーのジル・バイデン氏は元教師であり、全国教員組合員としても長年活動してきた。それにも関わらず、ジル氏はバイデン時期大統領が教育省のメンバーを発表するイベントに参加していなかった。その日、ジル氏は別の州で開催していた教師を感謝するイベントに出席していた。当日、全国教員組合会長とアメリカ教師連盟の会長が同席していた。ステージでジル氏は「ホワイトハウスは組合・連盟と協力する準備ができている」と述べていた。特に、ジル氏がセカンドレディーだったときの首席補佐官、シーラ・ニックス氏を教育省の首席補佐官に起用する計画があると発表した。つまり、ジル氏がいるホワイトハウスとニックス氏がいる教育省が、組合と連盟の協力体制が今後の教育現場にとって有益なものになると伝えたかったらしい。

教育長官に任命されたのは、現場を知り尽くしていると言われているミゲル・カルドナ氏だった。カルドナ氏は、教師・学校長・校区のトップの経歴をもっている。カルドナ氏の公約では、パンデミック中の学校再開が最大な課題であると述べている。その他、貧困に暮らす生徒や障害のある人々を教育的に支援する歴史的な予算額を注入すると約束した。そのほかに、一部の学生ローン債務の免除やコミュニティカレッジの無償化も期待されているようだ。

幼稚園から高校までの学校現場では、黒人やラテン系の生徒や障害のある生徒に対するルール緩和やトランプ政権によって覆されたオバマ時代の多くの規制を復活させることが期待されている。また、バイデン政権下では、ESSA 法における学力テストや説明責任の要件がもっと柔軟になることも期待されている。その中、バイデン新大統領の公約にもあった教師の給与引き上げの約束が最も期待されていると言っても過言ではない。

新政権で多くの期待をされている中、カルドナ教育長官は次のように述べている

「多くの生徒にとって公教育は、手入れが届いておらず、無視された、しおれたバラである。教育関係者はその美しさを維持するために毎日それを栽培するマスター・ガーデンナーでなければならない」